

高野長英の人生と著書

椿椿山筆 高野長英像
(国重要文化財)



奥州市立高野長英記念館

館長 渡辺 唱光

絵 今野 健 (顕彰会長)

高野長英は郷土が生んだ幕末の先覚者。世界の動きから閉ざされていた鎖国の時代に長崎の鳴滝塾でシーボルトに学び、抜群の語学力を生かして蘭書を翻訳し、日本医学の発展や民衆の命を救うための著述に励む一方、医者としての顔をあわせ持っていた。

外国の情勢にも通じていたがゆえに、国の行く末を憂えて『夢物語』を執筆したものの、幕府による激しい弾圧「蛮社の獄」が待ち受けていた。決死の思いで脱獄、逃亡し、天文学書の翻訳や、日本を欧米の侵攻から救うために西洋兵書の翻訳に励むが、その生涯は壮絶なクライマックスを迎え、最期は自害することとなった。その後、明治に入り宮内省(明治天皇)より「正四位」が追贈されて長英の名誉が回復した。

鎖国の中から近代日本の扉を叩いた長英の著書(計92点)の功績は多大である。長英の一生は長い歴史から見れば一瞬の流れ星のような輝きかもしれない。しかし、「長英の流れ星」は、私たちの心に飛び込んで永遠に生き続けている。

当時、江戸幕府は鎖国政策（外国との交流禁止）を200年以上続けていた。わずかにオランダと中国だけは例外として長崎の出島に限り貿易を行っていた。その鎖国政策により、日本は医学、天文学、兵学、民主化など、多くの分野でヨーロッパやアメリカから遅れをとっていた。また江戸幕府を批判すると、死刑や無期懲役にされたので、幕府を批判することができなかった。このような時代の中で、長英は蘭学（オランダの学問）を生かし、日本の夜明け（近代化）のために生涯を捧げた。

潜行時代

投獄されて6年後の6月30日の夜、牢屋敷の火事に乗じて脱獄（41才）。多くの知人や宇和島藩主に匿ってもらい、名前を変えながら各地を潜行。潜伏中も医業をし、天文学や兵書などの翻訳を続けた。

蛮社の獄

モリソン号事件を契機に、長英は幕府に外交方策を提言するため「夢物語」を執筆。ところが、この「夢物語」が幕政批判の罪に問われ投獄された（36才）。長英は投獄の不当・無実を訴え、赦免を求め続けるが認められなかった。

壮絶な最期と、 没後の名誉回復

硝酸で顔を焼き、偽名で江戸青山百人町で町医者を開業する（46才）。1850年10月30日、捕吏に襲われ格闘の末に自刃（47才）。没後「正四位」追贈。



この肖像は長英の死後、高野家が東京の小林写真館に依頼して制作したものの。

江戸開塾、尚齒会時代

27才の時、江戸麹町貝塚で「大観堂」と名付けた塾・医院を開業し訳述も行う。また、洋学に関心をもった者たちの集まりである「尚齒会」に参加し、大飢饉の対策案や外交策をテーマに研究した。

幼少年時代

水沢に生まれ、9才の時に父が亡くなり、高野家の養子となった長英は、祖父と養父から学問の手ほどきを受ける。

江戸遊学時代

向学心に燃え、江戸へ（17才）。極貧生活や苦難が続くが、吉田長淑の内弟子となり西洋内科を学ぶ。

長崎遊学時代

江戸から長崎へ渡りシーボルトの鳴滝塾に入門し（22才）、優れた言語力で頭角を現し、ドクトルの称号も得る。そこに、養父の死という報が届き、学問を続けるか帰郷するかで大いに悩む。

移動講座時代

シーボルト事件の後（26才～）、各地で集中講義と診療をし論文も著す。なお、手紙で水沢には戻らない決意を伝えた。

学問の家・高野家で幼少年時代（1才～16才）

- ◆ 1804年 5月5日、長英は水沢の吉小路で生まれた。父は水沢伊達家家臣の後藤惣助。母は水沢伊達家家臣の高野家から嫁いできた美也。その二人の三男として誕生。幼名は悦三郎。
 - ◆ **長英が9才の時に父が亡くなり、母の兄で医者をしている伯父・高野玄斎の養子となる**。玄斎には一人娘の千越しかいなかったのので、**長英を千越の許嫁とし、高野家を継いでもらおうとしていた**。
 - ◆ **祖父の高野元端は、京都で漢方医学を学んだ漢方医**。
 - ◆ **養父の高野玄斎は、『解体新書』を著した杉田玄白が経営する天真楼塾に入門し、蘭学を習得した蘭方医**。
- このような環境から、長英は医学に興味をもつようになる。



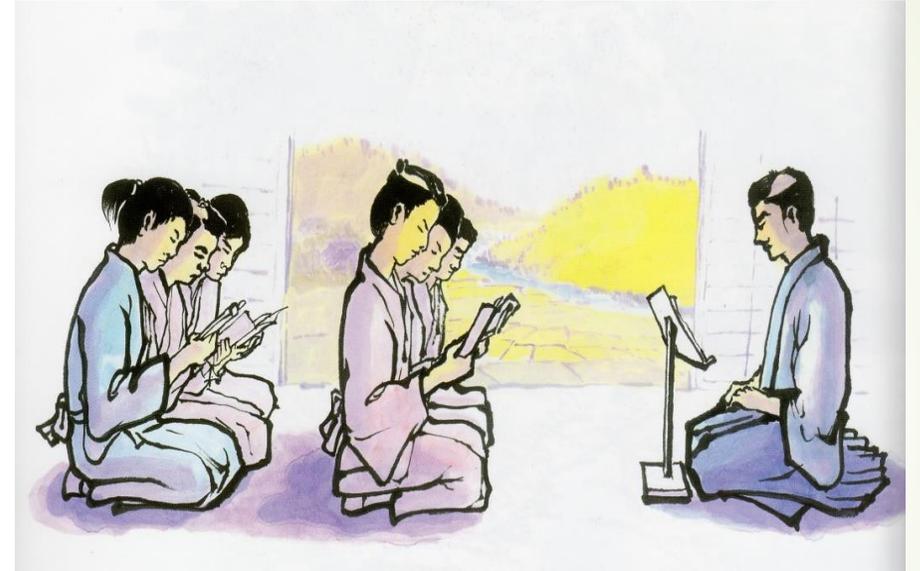
高野玄斎像

部分 紙本著色

愛情を受けて育った人は、大人になってから、その愛情を分け与えることができる（他人を大切に思いやる「仁の心」が育つ）。

- ◆ 長英が11才の時、祖父元端の隠居先である東山興田の「文治塾」で漢籍を学ぶ。12才の時には分塾「小森塾」で祖父の代講をし、同世代の村の子どもたちに漢籍を教授した。また、祖父から按摩術も学ぶ。

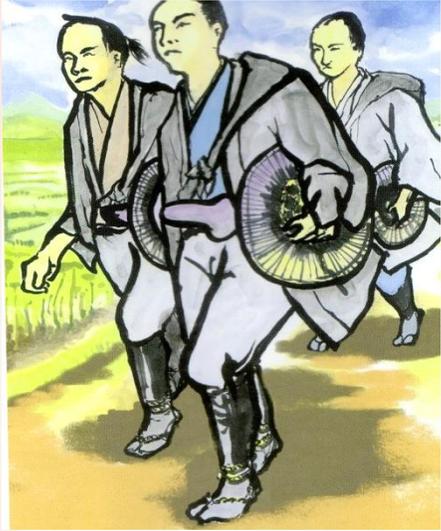
「長英は自らもよく勉強した。学ぶときはよく学んだが、遊ぶときは思い切って遊んだ。活発勇敢で特に相撲を好んだ。時間を正しく守ってよく教えたから、子どもらも実によくについて信望があった。」（高野長英傳）



- ◆ 14才になった長英は元服して髪型を変え、幼名の悦三郎から「**卿齋**（きょうさい）」と改める。
- ◆ 高野家の跡取りとして期待され、養父玄齋から江戸留学を反対されていたが、長英が16才の時、養父の代わりに出た**無尽講**で**15両**を得た。そのお金をもとに長英は蘭方医学を学ぶために、密かに江戸行きの準備を進めていたが、途中で計画が露見。しかし、長英の向学心・決意を知った養父玄齋は仕方なく江戸行きを認めた。

江戸遊学時代（17才～22才）

向学心に燃え、江戸へ。多くの苦難に直面



- ◆ 長英が17才の時、兄の後藤湛斎が漢方医学を学ぶために江戸に留学することになった。そのことを聞いた長英は旅費の都合をつけてもらい、兄の湛斎に同行した。長英と湛斎は水沢から北上川を船で石巻まで下り、いとこの遠藤養林(蘭方医を目指していた)と一緒に、仙台を経て江戸へ向かった。
- ◆ 3人は江戸日本橋で薬問屋をしている神崎屋源造のところに身を寄せた。神崎屋は水沢出身で養父玄斎の知人。後に長英の理解者・支援者となる。
- ◆ その後、長英は杉田伯元(玄白の養子、蘭方医)の門人となるが、住み込みが許されなかったため、神崎屋のもとから通って学ぶ。また、**朝晩の茶屋での食事代は、養父からの仕送りだけでは足りないため、夜は按摩のアルバイトをして日々を送った。**



◆ 長英が18才の時、吉田長叔の門人になり、**オランダ医学の論文を日本語に訳せるようになった。**

三余之学時(年の余りの冬、日の余りの夜、時の余りの陰雨の時を、
学ぶ時として机に向かった) ※養父宛(1823年)の書簡から

◆ 19才の時に、師である長叔の「長」の字をもらい「**長英**」に改名。
世に言う「高野長英」がこのとき誕生。



悲しいことが続く ①長英が20才の時、江戸で開業していた兄湛斎が病死。②養父玄斎も病の床に伏す。③江戸の火事で長英の家(赤坂)が焼ける。

不運も続く ①福島の宿の主から久米吉(石巻出身)の世話を頼まれた。その久米吉が江戸での奉公先で17両を盗んで逃げたので、それを弁償するために長英は自ら奉公人となる。②長英は江戸で偶然再会した幼なじみの平八郎に、働き口(奉公先)を紹介したが、平八郎は給料を前借して姿をくらました。奉公先(相手方)が長英の窮状に同情し、事件は示談で解決した。

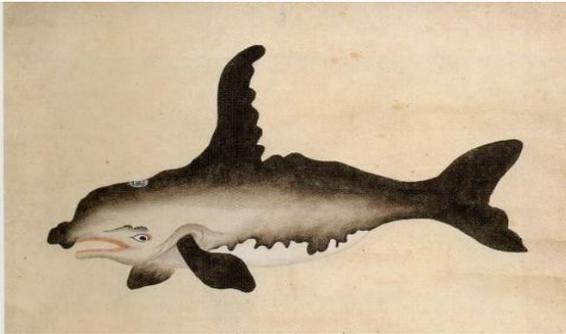
困っている人を見捨てておけない「仁の心」、長英の人柄。

長崎遊学時代 (22才～25才)



シーボルト肖像画
(長崎歴史文化博物館所蔵)

- ◆ 長英は22才の時、長崎に行き、シーボルトの鳴滝塾に入門した。
- ◆ シーボルトは門人たちに西洋の最新医学を教えるだけでなく、彼が興味のある日本についてテーマを与え、オランダ語の論文を提出させた。
長英はオランダ語で19の論文を提出。
- ◆ そのうちの一つ『鯨および捕鯨について』が高く評価され、シーボルトから「ドクトル」の称号(西洋医学習得の証明書)を与えられた。



高野長英筆 サカマタ鯨図

☆長英から得たシーボルトの鯨の知識は、シュレーゲルの『日本動物誌 海獣部』として、ヨーロッパで発表された。これにアメリカが着目。当時アメリカでは鯨の油を「機械の潤滑油」や「ランプを灯す油」として必要だった。それで、ペリーは黒船を率いて、近海に鯨が多い日本に針路を定めた(1853年)。長英の鯨の論文が、間接的な因果で黒船を呼び寄せ、日本の開国をうながした。



- ◆ 平戸藩松浦侯の依頼で翻訳『シケイキュンデ』(化学の研究書)
- ◆ 長州藩熊谷五郎左衛門の依頼で翻訳『蘭説養生録』(オランダの健康法)

長英がシーボルトに提出した蘭語論文

- | | |
|---|--|
| <p>① 鯨<small>くじら</small>および捕鯨<small>ほげい</small>について（文政9年春脱稿）
 ② 江戸アンコウの形態<small>ぶんかいせつ</small>についての和文解説
 ③ 長州千崎浦産<small>ちょうしゅうせんざきうらさん</small>シャチホコ<small>わぶんかいせつ</small>の和文解説及び蘭訳文<small>らんやくぶん</small>
 ④ 日本産若干魚類<small>じゃっかんぎょるい</small>について
 ⑤ 日本及び支那<small>およしな</small>の医薬<small>りゃっき</small>に関する略記
 ⑥ クマヤ・藍染<small>あいぞめ</small>について・早稲播種法<small>わせはしゅほう</small>
 ⑦ 飲膳摘要<small>いんぜんてきょう</small>
 ⑧ 花や枝<small>たく</small>を巧み<small>びん</small>に瓶<small>さ</small>に挿す法について
 ⑨ 日本婦人の礼儀作法・化粧・結婚風習について</p> | <p>⑩ 日本の茶樹<small>ちゃじゆ</small>の栽培及び茶の製法について
 ⑪ 南島志<small>なんとうし</small>（琉球島<small>りゅうきゅうとう</small>）に関する記述
 ⑫ 稲作<small>いなさく</small>について（文政10年8月24日）
 ⑬ 都（京都）より江戸への旅行案内記<small>ぶんせい</small>（文政11年）
 ⑭ 江戸の神社仏閣案内記（約323箇所<small>ぶんせい</small>の案内）
 ⑮ 京都の神社仏閣記（約117箇所を記述）
 ⑯ 鮫<small>さめ</small>の記（日本産のサメ類49種）
 ⑰ 狼と山犬について
 ⑱ 日本古代史断片（共訳）
 ⑲ 日本の神祇崇拜の由来について（共訳）</p> |
|---|--|

ルール大学ポーフム所蔵（②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑬⑭⑰⑱） 東洋文庫フィルム所蔵（⑫⑬⑮）

シーボルトはオランダに帰ってから、『NIPPON』『日本動物誌』『日本植物誌』をヨーロッパで出版し、日本研究の第一人者となる。

シーボルトと長英らは、当時の「ヨーロッパと日本をつなぐ架け橋の役目」を担った。

長崎遊学時代のその他の著書

- | | |
|--|--|
| <p>① シケイキュンデ（化学の研究書）
 ※平戸藩松浦候からの依頼</p> | <p>② 蘭説養生録<small>らんせつようじょうろく</small>（オランダの健康法）
 ※長州藩熊谷五郎左衛門からの依頼</p> |
|--|--|

長英のオランダ語の実力

— 『復軒雑纂』 高野長英行状逸話（大槻文彦著）より —

長崎で学んでいた鳴滝塾時代でのある日。蘭学者仲間が集まり、今日はオランダ語だけを使い、もし日本語を使ったらその都度罰金を払うことに決めた。一人二人と日本語を話す者が出てくるなかで、長英だけは一言も日本語を話さなかった。

そんな長英の不意をつこうと伊東玄朴は帰りしなに、いきなり長英の背中を押して階段から突き落とす。すると長英は「フエバーレイク！」と、「危ない」という意味のオランダ語で叫んだ。

それほど、長英の語学力はぬきんでていた。



千越愛用箏
長英の許嫁であった千越が
水沢伊達家より拝領した琴

- ◆ 長英は養父玄斎の一人娘の千越と許嫁になった時から、高野家9代目を継ぐことになっていたが、もっと学問を深めたいと思っていた長英は、水沢に帰るか悩んでいた。
- ◆ 長英が24才の時に養父の玄斎が亡くなり、その訃報の手紙を平戸での採葉中に受け取るが、長英は病気を理由に帰郷を拒んだ。高野家にとっては、当主が不在となり一大事（家督がいなくなると家臣の資格を失い、取り潰しになることも）。

移動講座時代

(26才～27才)

- ◆ 国外持ち出し禁止の日本地図をシーボルトが持ち出そうとしたことで、シーボルトは国外追放され(1828年、シーボルト事件)、鳴滝塾は終わる。
- ◆ その後、長英(26才)は福岡、広島、尾道、大阪を経て京都に移動。そこまでの道中、各地で旅館の一室を借りて開講し、診療も積極的に行った。

長英は、その診療記録『きゃくちゅうしょうあん客中證案』を書き著した。

『客中證案』の第1巻には69症例、第2巻には140症例、計209症例が記録されている。症例には、患者の出身地、病状の診断と治療方法及び処方などが書き留められている。それらの病名のうち、最も多いのが梅毒や淋病などの性感染症で35例にのぼる。次に多いのが体内に住み着いた回虫などの寄生虫によって起こる症状で12例。天然痘の5例も。

- ◆ 長英が京都に滞在していた 1830 年、大地震（マグニチュード6.5）が起きた。
（死傷者1600人。京都御所や二条城なども被害を受けた。）

その時、長英は『^{たいせいじしんせつ}泰西地震説』を書き著した。原書はオランダの『ボイス事典』

☆日本では当時、地震はナマズが引き起こすなどの迷信があった。
しかし『泰西地震説』によって、西洋の科学的な地震説が世の中に
広まり、日本の地質学の発展に役立った。

☆この論文では、地震の原因は硫黄と硝石などとの化学作用であるとし、
火山爆発をともなう地震の事例なども紹介している。

迷信で不安になっていた人々を、科学的な発見や真理に
よって自由にしたいと、長英は考えていた。

- ◆ 長英(27才)が尾道に滞在中、水沢から高野家親族一同の手紙をもった小野良策に会い、長英は帰郷を促された。長英は悩んだ末、書状で高野家相続の放棄の決心を伝えた。「自分は学問に専念したい。千越(養父の娘)に婿養子を迎え、高野家相続を。」
- ◆ 長英は高野家と絶縁し、士分を捨て(27才)、学問に生涯を捧げる決意を新たにした。その時、長英がその理想(壮大な気概)を詠んだ漢詩がある。

學術走西域 (がくじゅつ せいいきを はしり)

双眸呑五州 (そうぼう ごしゅうを のむ)

看吾業就後 (みよ わがぎょうなるの あとを)

海内仰餘流 (かいだい よりゅうを あおぐを)

自分の学術研究の範囲は、西洋諸国にまで走り及び

自分の二つの目は、全世界の姿を見つめ知りつくしている。

ゆえに、自分の仕事が成就した後をみるがいい

そうすれば、世界中の者が、自分の研究の素晴らしいやり方の一部でも尊敬して見ることであろう。

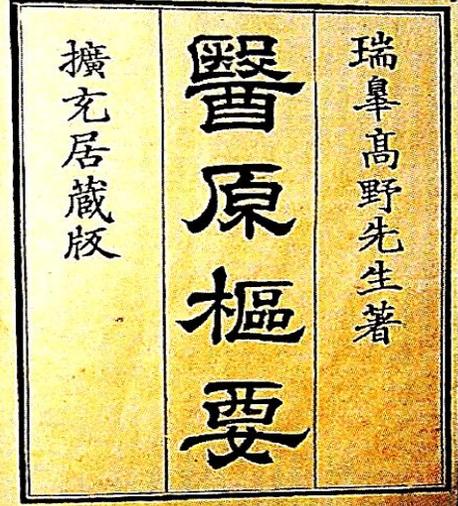
鎖国の中「日本の将来のために、蘭学の知識を生かしていくことが自分の役割だ。」と認識し、長英は決意を新たにしている。

しょうしかい

江戸開塾、尚齒會時代（27才～36才）

◆長英(27才)は江戸に入り、「大観堂」と名付けた塾・医院を開業。
 拔群の語学力を生かし翻訳・著述に励む。

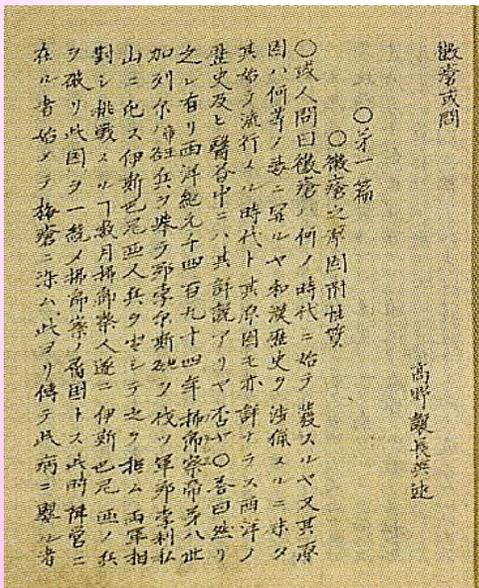
1. 医原枢要 <small>いげんすうよう</small>	12. 奇器集成 <small>ききしゅうせい</small>	24. 泰西人身究理書 <small>たいせいじんしんきゅうりしよ</small>	36. 遠西水質論 <small>えんせいすいしつろん</small>
2. 居家備用 <small>きよかびよう</small>	13. 西洋雜記 <small>せいようざっき</small>	25. 火術全書 <small>かじゅつぜんしよ</small>	37. 人身發蒙 <small>じんしんはつもう</small>
3. 牛痘接法 <small>ぎゅうとうせつぽう</small>	14. 平体論 <small>へいたいろん</small>	26. 人身活理 <small>じんしんかつり</small>	38. 觀海日録 <small>かんかいにちろく</small>
4. (勸農備荒) 二物考 <small>かんのうびこう にぶつこう</small>	15. 泰西胸水新書 <small>たいせいきょうすいしんしよ</small>	27. コンスプリング内科書 <small>ないかしよ</small>	39. 昆斯痘麻門 (蘭文) <small>こんすとうまもん らんぶん</small>
5. 産科提要 <small>さんかていよう</small>	16. 驗温管略説 <small>けんおんかんりやくせつ</small>	28. 泰西二十四方 乾・坤 <small>たいせい ほう けん こん</small>	40. 昆斯小児病門 (蘭文) <small>こんすしようにびようもん らんぶん</small>
6. 漢洋内景説 <small>かんようないけいせつ</small>	17. 驗气管略説 <small>けんきかんりやくせつ</small>	29. 結石キ一グド論 <small>けっせき ろん</small>	41. 夢物語 <small>ゆめものがたり</small>
7. 外科薬劑書秘録 <small>げかやくざいしよひろく</small>	18. 眼目究理編 <small>がんもくきゅうりへん</small>	30. 黴瘡或問 <small>ばいそうわくもん</small>	42. 蘭日外科辞書 <small>らんにちげかじしよ</small>
8. 瘧疫考附避疫法 <small>おんえきこうふひえきほう</small>	19. 法爾密里兒 <small>ほーみりじ</small>	31. 黴瘡摘要 <small>ばいそうてきよう</small>	43. 蘭文医書 (眼科) <small>らんぶんいしよ がんか</small>
9. 避疫要法 <small>ひえきようほう</small>	20. 痢論 <small>りろん</small>	32. 病学編 <small>びょうがくへん</small>	44. 蘭文外科医書 <small>らんぶんげかいしよ</small>
10. 瑞臯活套 <small>ずいこうかつとう</small>	21. 泰西原病発微 <small>たいせいげんびょうはつび</small>	33. 繙卷得師草稿 <small>はんかんとくしそうこう</small>	45. 和蘭外科要方 <small>おらんだげかようほう</small>
11. 和蘭史略 <small>おらんだしりやく</small>	22. 各病療法記聞 <small>かくびょうりょうほうきぶん</small>	34. 質問本草書 <small>しつもんほんそうしよ</small>	46. 驗温管目盛翻訳 <small>けんおんかんめもりほんやく</small>
	23. 瑞臯堂方函 <small>ずいこうどうほうかん</small>	35. 聞見漫録 <small>ぶんけんまんろく</small>	47. 蘭文書 <small>らんぶんしよ</small>



医原枢要 (個人蔵)

◆ 医学の専門書 (43点)

- 『^{いげんすうよう}医原枢要』 日本初の生理学書。臓器の機能、病気の原因と症状との因果関係。
- 『^{ぎゅうとうせっぽう}牛痘接法』 牛の天然痘のウイルスを人の体にうえつけて免疫力をつける「種痘」の解説。
- 『^{ばいそうわくもん}黴瘡或問』 梅毒の起源、治療剤、治療法について。
- 『^{らんいちげ かじしよ しょそうちりょうほうしよ}蘭日外科辞書(諸創治療法書)』 傷の症状や治療について、蘭文に訳文を付した。



黴瘡或問
(国重要文化財)

☆ これらの長英の著書は、日本の医学の基礎となり、その後の発展に寄与した。

☆ 長英の門下生のひとりである佐藤泰然^{さとうたいぜん}は、下総佐倉に医学塾順天堂を開くとともに、佐倉藩の種痘を実施。その順天堂には全国から塾生(約 110 名)が集まり、現在は附属病院を有する順天堂大学へと発展している。

◆ 西洋自然哲学史を、長英が日本で初めて紹介

『聞見漫録』の中の「西洋学師ノ説」

古代中世(紀元前)の自然学から始まり、ニュートンの万有引力の発見まで紹介し、西洋の近代科学(蘭学)の実証的特質を著した。

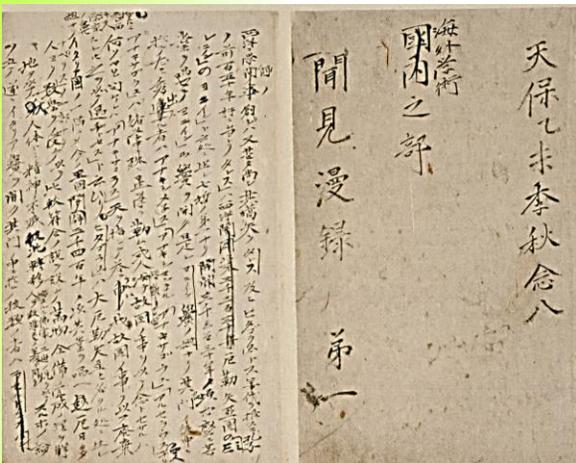
○16世紀にコペルニクスが、天道の説を看破し(見破り)、地動の真理を發明。

そのコペルニクスの説をガリレイが実測で証明した。

○デカルトについて、「世人千古の学風を棄て、実学の真理に入るは、この人の力なり」。(理性によって確かめ直しが保証されることが、学の第一条件。)

○近代科学では「実測の学」が行われ、自然科学が進歩した。

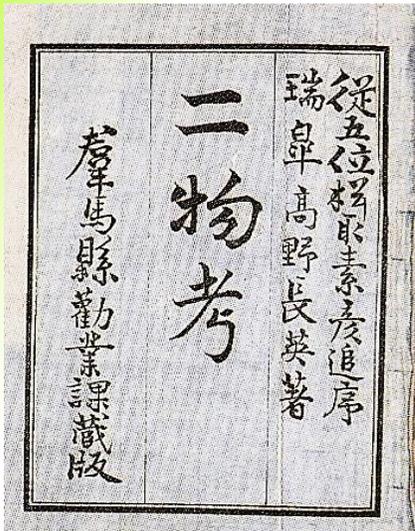
ここで紹介された「実学・実測」の学風は、日本における近代科学の各分野の発展に大きく寄与した。なお、当時は蘭学に対する偏見・差別があって、蘭学は怪しい学問だと考えている人が多かった。その偏見・差別への反骨心から、長英は「西洋科学が本質・真理に迫る学問」であることを強調したかったと思われる。



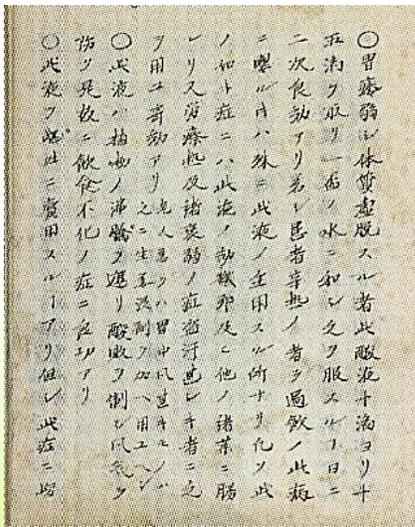
聞見漫録
(国重要文化財)



ルネ・デカルト
(1596~1650)



救荒二物考



居家備用
(国重要文化財)

◎長英は飢饉対策や西洋事情を研究する「^{しょうしかい}尚齒会」に参加する。

◇ 庶民の要望に応える長英の著書

- ◆天保4年～10年まで「^{てんぽう だいききん}天保の大飢饉」が全国を襲い、多くの人々が亡くなった。
- 『^{きゅうこうにぶつこう}救荒二物考』 寒冷地でも育つ、ジャガイモとソバの栽培を勧めた本。
- 『^{ひえきようほう}避疫要法』 伝染病予防の本。ひらがなを多用して読みやすく書いた。
- 『^{きよかびよう}居家備用』 家庭用医学書・常備薬の解説書。

☆『^{きゅうこうにぶつこう}救荒二物考』で示されたジャガイモとソバは、米のかわりの非常食として庶民に広まった。群馬県では明治15年に『救荒二物考』を再版している(左上の写真)。

☆『^{ひえきようほう}避疫要法』では疫病を予防する方法(隔離病棟、部屋の換気など)を示している。

☆『^{きよかびよう}居家備用』では医者のない地方での急病時の薬や応急処置の仕方を示した。

☆門下生に与えた長英蘭文格言(和訳)

私利私欲のためでなく、学問を世の人々のために。

利他の心、つまり、他人を大切に思いやる「仁の心」を。

人は学ぶためには
食わねばならない
しかし、食うために
学んではならない

【意味】

ちいさな水滴でも
長年かかれば 石にも
穴を空けることができる

※学問へだけでなく、当時は鎖国、洋学への
偏見、打ち続く飢饉という時代だからこそ、
「努力の大切さ」を示したのかもしれない。
いつの時代にも適用する重みをもっている。

この長英の蘭文を和歌に訳した中浜東一郎
は、医学博士でジョン万次郎の長男である。

長英蘭文座右銘 天保七（一八三六）年
「たえねばやはては石をもうがつらん

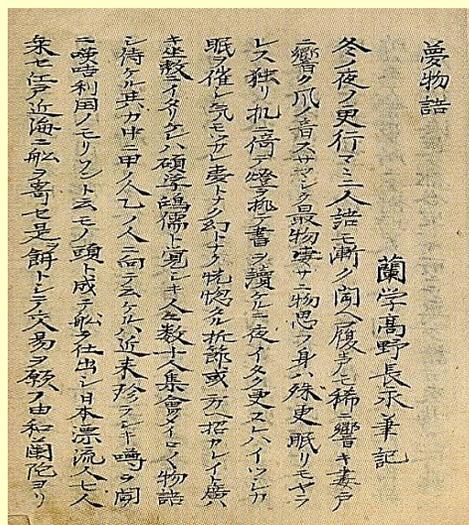
かよわき露の力なれども」

（高野長英蘭文書、中浜東一郎訳）

Studekamer!
De waterdrippel maakt den
Steen hol, niet met geweld,
maar door er dikmaals
op te vallen.

たえねばや
はては石をもうがつらん
かよわきつゆの
ちからなれども
高野長英一八三六年
オランダ語座右銘和訳
高野長英 謹言

- ◆ 長英が34才の時、イギリス(実はアメリカ)のモリソン号が漂流していた日本人7人を助けて送り届けに来航したが、幕府は異国船打払令により大砲で打払う事件(モリソン号事件)が起こる。
- ◆ それを知った長英(35才)は『**夢物語**』を著して、幕府の外交方策を批判した。



夢物語 (個人蔵)

『夢物語』の主な内容

- イギリスは航海術が優れ、海軍力も充実しているので、周りの国々は警戒心を怠らないようにしている。(だから、イギリスとの武力交戦をしてはいけない)。
- 日本の漂流民をあわれんで親切にも送り届けに来た船を大砲で追い払ったりすれば、日本は国民を大切にしない野蛮で人道的でない国と思われてしまう。
- 漂流民を届けてくれたことに、お礼の品物をさしあげること。さらに、よい機会なので近年の他国の情報を聞くことができれば国益にもなる。
- 重要な江戸湾ではなく、長崎など 他の港で漂流民を受け取ること。

だてむねなり

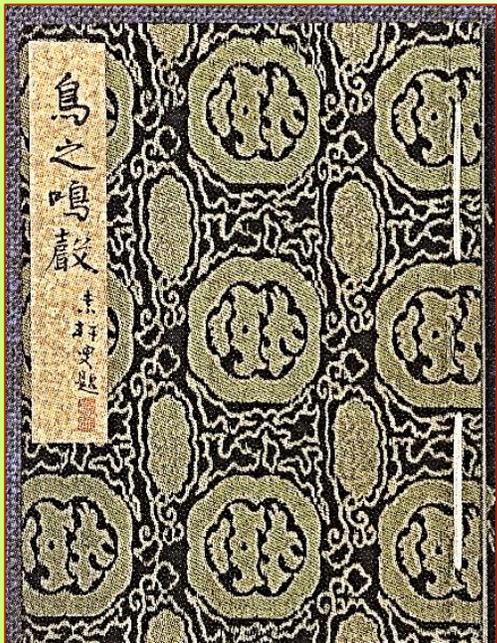
☆共感する開明派の人々により書き写された。宇和島藩主の伊達宗城も理解を示した。
 ☆長英死後、ペリーと日米和親条約を結ぶ際、『夢物語』や諸藩の意見を参考に、下田と函館を開港して「開国」となった。

蛮社の獄（36才～41才）

- ◆ 幕府老中 水野忠邦と家来の鳥居耀蔵は、儒学を重んじていたため、科学的な洋学を研究する尚齒会のメンバーを大変嫌っていた。
- ◆ 幕府は浦賀の海岸測量を、鳥居耀蔵と、尚齒会の江川太郎左衛門に命じたが、江川は最新式の西洋流の測量を行ったため、鳥居は遅れをとり面目を失う。そして鳥居耀蔵は尚齒会を潰すため陰謀を企んだ。鳥居は、「尚齒会が鎖国の決まりを犯して小笠原諸島に渡り、外国に密航しようとしている。」とでっちあげ、尚齒会の渡辺華山や高野長英たちを逮捕した。
- ◆ その後の判決では、尚齒会の海外密航の企ての証拠がないことが判明。



- ◆ しかし、渡辺華山は『慎機論』を書いて幕府を批判したことで、国元の田原藩での永蟄居（えいちっきょ・謹慎）。後に華山は自害した。
- ◆ 高野長英は『夢物語』で幕府を批判したことにより、終身禁固刑となり、小伝馬町の百姓牢に入れられた。



◆ 牢内での長英の著書

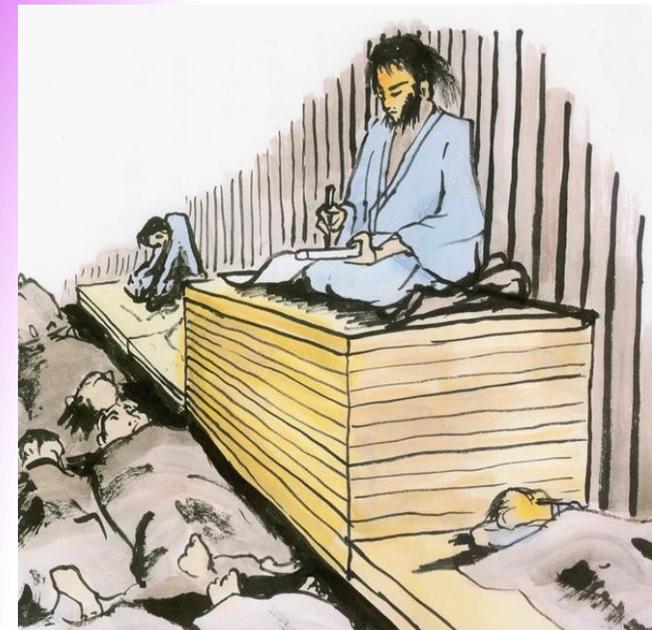
とり なくね わすれ たみ
○『鳥の鳴聲（和寿禮か多美）』

「夢物語は国家を思うからこそ著わしたもの。罪に非ざれば、世に恥ずる気なし。」と無罪を訴えている。（遠藤勝助へ送った）

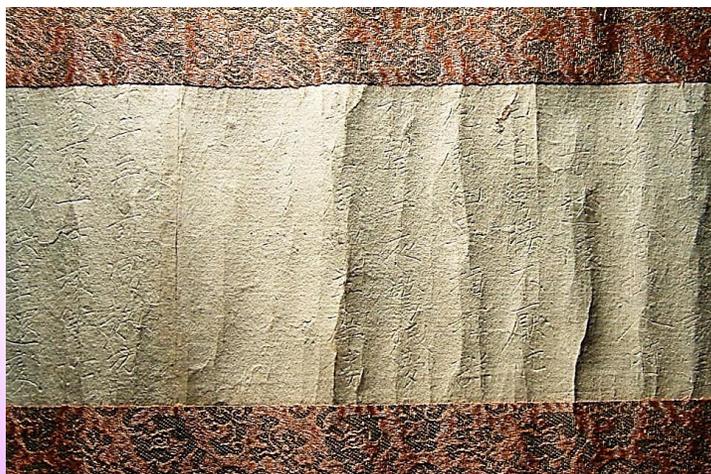
ばんしゃそうやくしょうき
○『蛮社遭厄小記』

「蛮社の獄は、蘭学を嫌う幕府目付の鳥居耀蔵による言論弾圧である。」と書いている。（前沢の茂木恭一郎へ送った）

- ☆ 江戸幕府崩壊後に自由民権運動がおこる中、藤田茂吉が『文明東漸史』で蛮社の獄の悲劇的な出来事を記し、高野長英や渡辺崋山を自由民権運動の先駆者として紹介した。
- ☆ 明治時代から現代にかけて、歌舞伎・講談・戯曲・時代劇で長英の悲劇的な出来事が上演され、書物も数多く発刊された。



- ◆ 牢内で長英は囚人たちの手紙の代筆をしたり、病人の治療をしたりして信頼を集め、長英は牢名主になった。なお、新入りの囚人は「ツル」という隠し金を牢名主に収めるのが習わしで、長英は数年間で大金を所持していたと思われる。そのお金で、筆・紙などを購入できた。
- ◆ 長英は、『万国地理書(世界地理学辞典)』の翻訳や、寄場人足の病人の介護・治療を願い出て出獄(赦免)を望んだが、幕府は認めなかった。



高野長英 筆 ごくちゅうかくひつしぶん 獄中角筆詩文 1844年正月

角筆とは木を削ってとがらせた物を使い、紙に傷あとをつけて文字を記したもの。

この詩文に「牢内での やるせない思いや脱獄の意思」をひそかに挿入し、

いとこ も ききょういちろう
前沢に住んでいる従弟の茂木恭一郎に手紙と一緒に送った。

■ 第一漢詩 ※同志を失ったが再会への望み

かつ ぶんけい ちか いくだん じ
 嘗て勿頸（親しい交際）を盟いしは、幾男兒
 今日、憂いを分かつは、果たして是誰ぞ
 かん え けん こん いま われ す
飲得たり、乾坤（天地）、未だ我を棄てざるを
 あに なぜ さい かい おん しゃ とぎ な
豈（なぜ）、再會して、恩に謝する時、無からんや
 みぎ てい
右、呈す。
 も くん そつか
茂君（茂木恭一郎）の足下（同輩）に

■ 第二漢詩 ※投獄された身の不遇と牢生活のつらい現状

かつ きゆうやく うらな めい い え
 嘗て窮厄（苦しみ）を占いて、明夷（暗君の禍）を得たり
 びうん すで い
微運（悲運）、已に醫すべからざるを知る
 あやま りょうりん ふ ふ
誤ちて龍鱗（竜の鱗）に觸れ、虎の尾を履めり（幕府の逆鱗）
 かくしつ せん おう じ
長く鶴膝（細足）を存し、鷓鴣に屈せり（かもめの兒にさえ屈服）
 ちゆうあん
濛暗（小雨降り暗い）なり
 せい いん と と ひる まさ くら
晴陰（晴と曇）、戸を鎖ざし、晝、當に暗し
 さん ひ
惨非（むごく悲しい）なり
 そう ろ ごろも め さら かな
霜露（しもつゆ）、衣を沾らし、夜、更に悲し
 しん しょ よろず わ と つく がた
心緒（心のうごき）、萬に分れし、説き盡し難し
 む こん たまたま こ じん あ
夢魂（夢の中の魂）、偶、故人に會う時
 みぎ じゅうかい
右は述懐

■ 第三漢詩 ※獄中での老母への思い

はく しゆ わん よう いそ いた
白首（白髪頭）、彎腰（腰曲がり）、忙がしさを厭わず
 ほうちゆう さい じ し き つまび
庖厨（台所）の細事、指揮、詳らかなり
 せき せい はん や さん む
析聲（拍子木の音）、半夜（真夜中）、残夢を驚かす
 しゆ ざ かたわ ろう なぬし あ
身は獄中の主座の傍ら（牢名主）に在り
 みぎ はは
右は母を夢見る

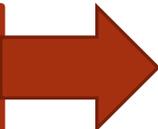
■ 第四漢詩 ※12年前の追想と諦年の吐露

こうじほう ぐう
十二年前、麴坊（江戸麴町貝坂）に寓（仮住い）す
 い げん じょうし こうしゆ いそが
醫原（醫原枢要）の上梓（出版）、校讐（校正）に忙しかりき
 ほし うつ もの か こと また かわ
星移り、物換わり、事、遠、變る
 おもむろ ぶつみよう と な ゆう ひ おく
徐に佛名を唱えて、夕日を送る
 みぎ さき たつ とし い げん すう よう こく
右は、前の辰の歲（天保3年）、醫原枢要を刻し、
 いま こと し せき こくちゆう あ
今、茲に同じ支（弘化元年）、獄中に在りて
 のうせき ついぞう
曩昔（むかし）を追想し、
 ひ もん は た
悲悶（悲しみもだえ）の張るに堪えず（外に張り出すのに堪えられない）

■ 第五漢詩 ※苦慮の一を表明

さんじゅうご とし ざいにん
三拾五の年、罪人となる
 ぜん ろ そうやく こしん おもん
善慮（麴町居）、遭厄（災）、孤身（老母）を慮ばかる
 く しん せ かい しゅうふうきゅう
苦辛（非常に辛い）の世界、秋風急なり
 せ けん こ そう ま ときいた
世間、孤霜（自らの境遇と後家となった老母）、先ず節籜る
 とし すで こう しん うつ わ
歳、既に甲辰（弘化元年）に移り、我が
 く りよ いつ あら
苦慮の一を表わす

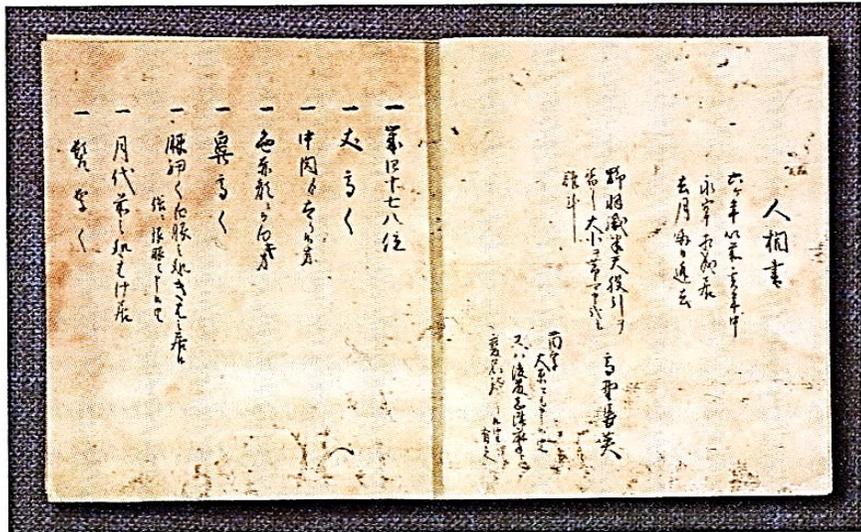
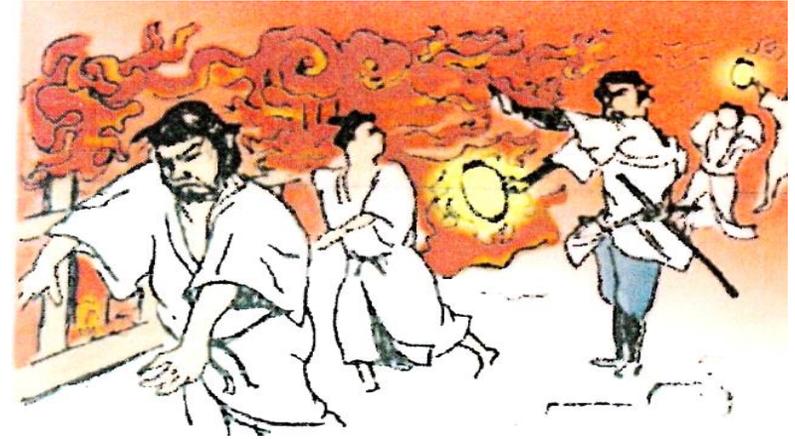
この文面に、脱獄の意思を
ひそかに挿入した。



潜行時代（41才～47才）

脱獄し、旧体制の変革を夢見て各地に潜伏（医業や翻訳も）

- ◆ 投獄されて6年後の1844年6月30日（午前2時頃）に牢屋敷が火災になり、長英（41才）は「切放し」で3日間釈放となるが集合場所に戻らずに脱獄した。 それを知った鳥居耀蔵は激怒し、長英を重罪犯として全国に指名手配した。

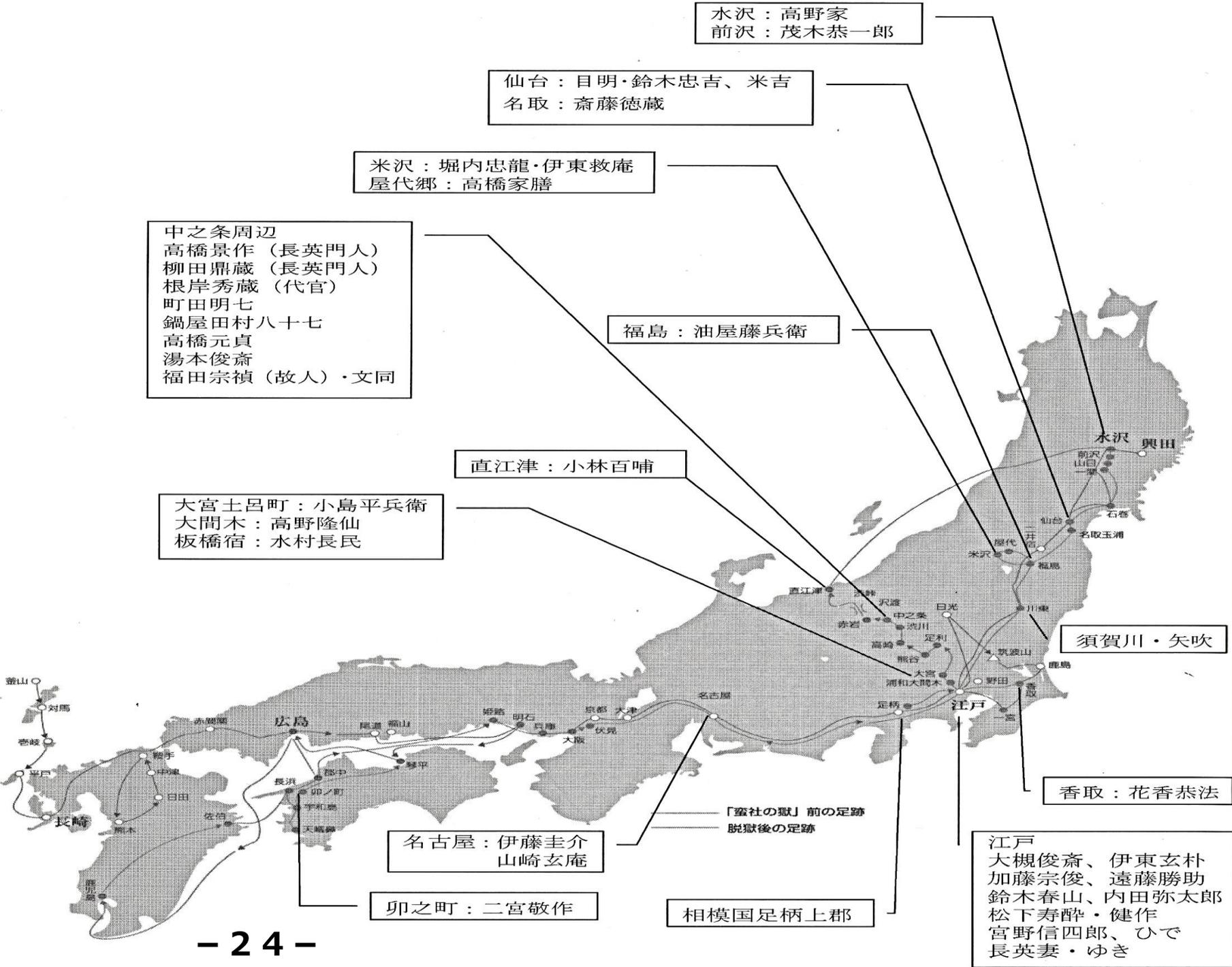


高野長英手配触書（控え）
天保15（1844）年8月1日

国重要文化財

☆ おそらく長英は、「牢屋の中で一生を終えることはできない。私は医学の新しい道を開く。国の外交方策の間違ったやり方を直す。欧米列強の侵攻から日本を守るために蘭学の能力を役立てたい。」と固く自分に誓い、決死の思いで脱獄したと思われる。

長英は知人を頼って各地を潜伏する。まず、江戸内で知人や門人を訪ねて衣服や旅費などをもらう。その後、大間木(埼玉)の高野隆仙のもとに潜伏。しかし、間もなく幕府の追手が迫り、上州に逃れて高橋景作などに匿ってもらい、その間、医者として民衆の診療を行った。その後、直江津、山形、秋田を経て、1845年10月に水沢(前沢)で母美也と再会を果たし、福島、米沢を経由して、江戸に潜伏した。



◆ 江戸に戻った長英は、潜伏しながら天文学書や兵学書の翻訳に励んだ。

◇ 匿ってくれた天文学者の内田弥太郎のために、西洋の「天文学書」を翻訳した。

そん も る し せい へん

○『**遼謨児四星編**』 当時、世界で初めて発見された四つの小惑星と、天王星の紹介。

せい がくりゃき

○『**星学略記**』 惑星、太陽の黒点、地球の公転、太陽の自転などを解説したもの。

◇ かつて門下生であった鈴木春山から、「黒船の侵略から日本を救うために、西洋の最新の兵学書を翻訳してほしい。」と頼まれ、次の西洋兵学書を翻訳した。

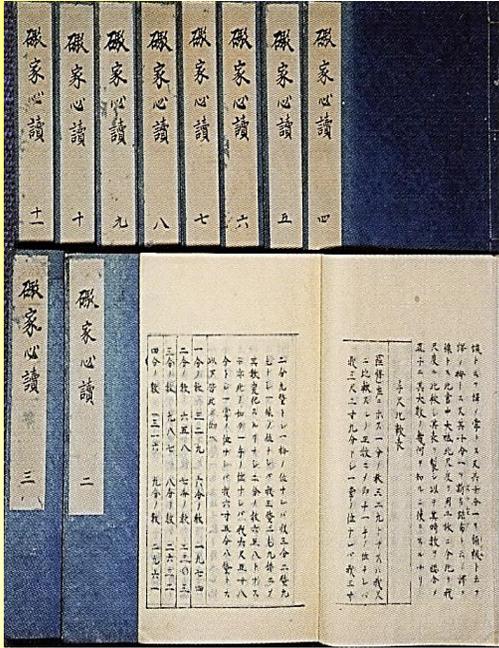
さん べい たくち ー き

○『**三兵答古知幾(27冊)**』 ナポレオンが編み出した戦術。三兵とは歩兵・騎兵・砲兵のことで、それらを総合的に運用した戦術。日本の国防の指南書に。

ち ひ いちじょ

○『**知彼一助**』 イギリス・フランスの兵制、ヨーロッパの軍備の状況等が書かれている。

☆ 2つの天文学書は、当時の日本にとって最新の天文学の論文であった。長英の功績を記念し、1977年に発見された小惑星に「Takanochoei 8133」と命名。
☆ 当時、ロシア、イギリス、アメリカなどの船が日本の近海に接近しており、特に海路に面した藩では、海防策に関心をもつ大名が多くなってきていた。そのような中、長英が書いた『三兵答古知幾』などは、外国艦船の攻撃から日本を守るための重要な軍備情報となった。その後、列強から侵略されない「自立した日本」になったのは、まさに高野長英の翻訳のお陰でもある。



砲家必読

◆ 外国艦船の攻撃から日本を守るために、沿岸警備の命令が幕府から各藩に出ていた。そのために各藩では、西洋の最新の砲術を知る必要があった。そこで^{だてむねなり}宇和島藩主伊達宗城は逃亡中の長英を宇和島藩に招き、オランダ兵学書の翻訳を長英に依頼した。

◆ 長英(45才)は名を伊東瑞溪^{いとうずいけい}と変え、五岳堂(宇和島藩初の蘭学塾)を開いた。※これからは、英語も必要であると話した。

◆ 長英はオランダの兵学書を日本語に訳し、次の本を書いた。

○『^{ほうかひつどく}砲家必読(全11巻)』 砲台の作り方と使い方の解説書。

○『^{しんせいてっぽうようちゅうほう}新制鉄砲鑄法』 良質な鉄を生産するための反射炉築造の解説書。西洋式大砲を作るには必要。

☆ 『砲家必読』をもとに、長英は久良砲台の設計を行い、外国船への防御に備えた。

☆ 江川太郎左衛門(伊豆韮山代官)は鉄製の西洋式大砲を作るために、『新制鉄砲鑄法』を入手し、良質な鉄を生産できる韮山反射炉を築造した(世界遺産)。

おしよせる黒船。長英は^{せんこう}潜行して^{きゅうこく}救国の^{ほんやく}翻訳

天文学書（3点）

兵学書（14点）

医学書など（3点）

- | | |
|--|--|
| 1. ^{そんもるしせいへん} 遜謨児四星編 | 11. ^{せいようほへいきょうれんじょうほう} 西洋歩兵教練定法・図付 |
| 2. ^{せいがくりゃっき} ^{そうこう} 星学略記 草稿 | 12. ^{かいぼうしんぺん} 海防新編 |
| 3. ^{らんぶんせいがく} 蘭文星学 | 13. ^{さんべい} デケル三兵タクチーキ |
| 4. ^{ちひいちじょ} 知彼一助 2冊 | 14. ^{しんせいてっぽうようちゅうほう} 新制鉄砲鎔鑄法 2冊 |
| 5. ^{さんべいたくちーき} 三兵答古知幾 27冊 | 15. ^{らんぶんへいしよ} ^{まきもの} 蘭文兵書（巻物） |
| 6. ^{ほうかひつどく} 砲家必読 11冊 | 16. ^{らんぶんへいしよ} ^{さっし} 蘭文兵書（冊子） |
| 7. ^{どぞうだいばちくぞうほう} 土蔵臺場築造法 | 17. ^{せっけん} ^{でんしよ} 石鹼ホスホルホ一伝書 |
| 8. ^{へいせいぜんしよ} 兵制全書 9冊 | 18. ^{やくぎょうひつようのしよせきもくろく} 訳業必要之書籍目録 |
| 9. ^{どぞうだいばてきよう} 土蔵臺場摘要 | 19. ^{やくしよかいだい} 訳書解題 |
| 10. ^{せいようだいばずしきおよびほうぐ} 西洋臺場図式及砲具 | 20. ^{ぼうやくようぶんかい} 旁訳洋文解 |

当時の長英は、全国に指名手配されている身であった。しかし「外国艦船の攻撃の危機から日本を救うため」という使命感から、兵学書の翻訳に励んだ。

壮絶な長英の最期（47才）

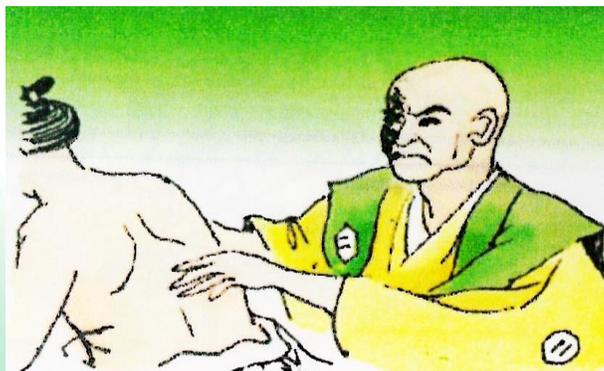
開国を見ずして逝く



高野長英の隠れ家
(宇和先哲記念館提供)

愛媛県史跡

シーボルト鳴滝塾の先輩門人の二宮敬作の居宅裏
離れに、前後2回にわたって匿われている。敬作は
シーボルトが去った後、日本初の産科女医となる
シーボルトの娘、後の楠本イネを育てていた。(愛
媛県西予市宇和町卯之町)



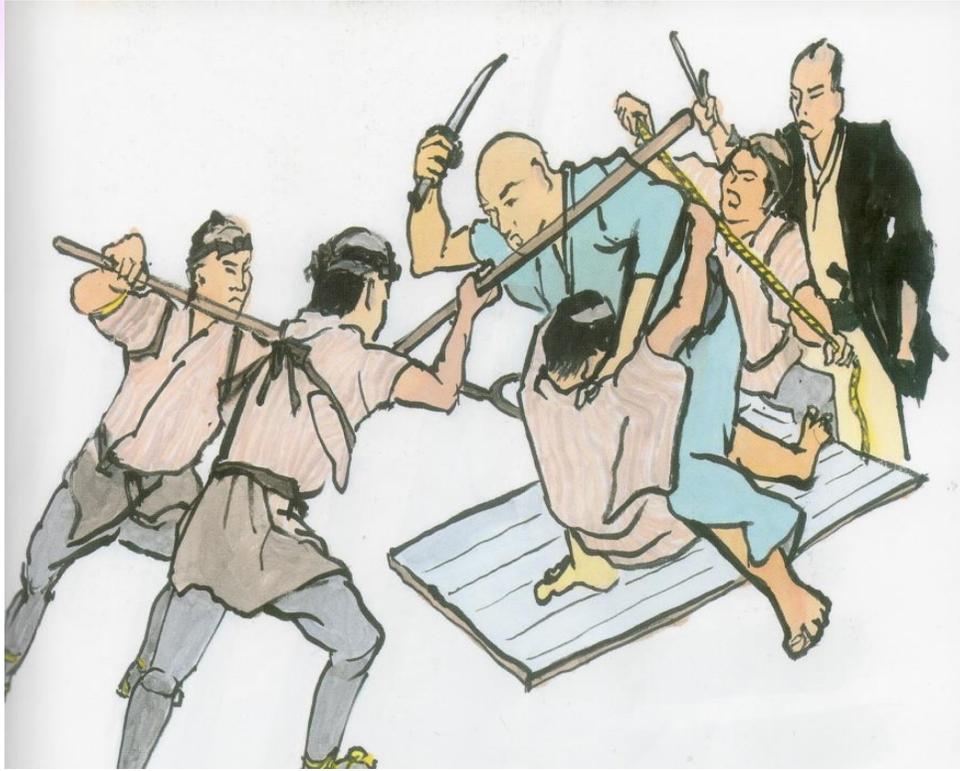
- ◆ 宇和島を離れた長英は、**卯之町の二宮敬作の家の離れに匿ってもらう。**
- ◆ **長英(46才)は江戸に再潜入した。**(自分の海防策を幕府へ)
- ◆ 江戸で長英は翻訳業で生計を立てていた。だが江戸幕府は蘭文の翻訳や流通を規制したため、長英は翻訳の仕事ができない状況になった。
- ◆ 1849年夏、**長英は顔を硝酸で焼いて人相を変え、「沢三伯」と名前も変えて、青山百人町で町医者となった。**

医療で人々を助けたいという「仁の心」

- ◆ 1850年夏、長英(47才)は勝海舟(28才)と密会し談論した。長英は荻生徂徠の『軍法不審』に**後書き(※)**を記し、勝海舟に贈った。
(※)『戦法は時代の変化と軍器の制作にもとづいて立つべし』の記述は高妙の確論なり。

時代の変化に対応することが大切

☆ 勝海舟は、後に江戸幕府の幕引き(江戸城の無血開城)を成し遂げた。



◆ 長英は人が家に近付いたら分かるように、わざと落ち葉を敷きつめていた。しかし、1850年10月30日、激しい風雨の中、長英は自宅にいるところを南町奉行所の捕吏7人に襲われる。短刀を抜き抵抗しようとした長英は、逃げ切れないと見るや自分で喉を突き、そのまま息絶えたという。長英47才、「日本の夜明け」を見ないで最期となった。

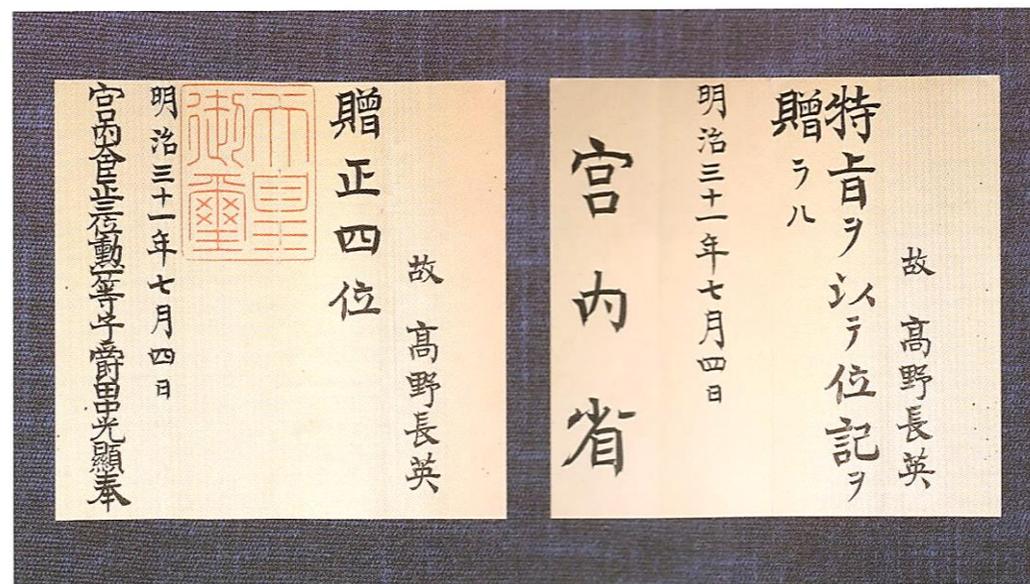
- 長英の死から3年後にペリーが来航して、日本に「開国」をせまった(通商と捕鯨基地を求めて)。
- 翌年、ペリーの要求に応じて「日米和親条約」を結ぶ。その際、長英が書いた『夢物語』の内容「重要な江戸湾ではなく、他の港を開くべき」を参考にし、下田と函館が開かれ、日本の開国が実現した。

没後に見直された長英の功績

宮内省より「正四位」が追贈され、名誉回復

- ◆ 1867年に大政奉還が行われ、江戸幕府は崩壊。その後、国会開設などを求める自由民権運動が起こる。この運動の高まりの中、**それまで罪人として扱われていた長英は、自由民権運動の先駆者として見直された。**
- ◆ 1886年、歌舞伎『夢物語盧生容画』が新富座で上演。連日超満員。
- ◆ 1898(明治31)年、**宮内省(明治天皇)より、長英に「正四位」が追贈されて名誉が回復。**

※長英没後50年に建てられた「**贈正四位高野長英碑**」(青山善光寺)の碑文は、**勝海舟が撰文した。**
その碑文の中で「**正四位は、長英が日本で初めて西洋兵書(三兵答古知幾)を訳した功績に対して、朝廷から贈られた。**」と、**勝海舟が記している。**



故高野長英宛位記贈書 外書「上」 明治31(1898)年7月4日(写真右)
位記贈正四位 明治31(1898)年7月4日(写真左)

高野長英から学ぶ【メッセージ】

鎖国の時代に、日本の進むべき必然的可能性と克服すべき困難を、長英は予知していました。その長英の「夢・希望」は「真理(正しいこと)を実現すること」でした。日本の医学の発展、民衆の命を守ること、外国艦船の攻撃の危機から日本を守ること、という「真理の実現」が長英の「夢・希望」であり、そのために蘭学の知識を生かし、生涯で本を合計92点も書き著しました。

「真理の実現」には「仁(思いやり)」「知識」「行動力」が必要だと言われています。長英の場合、民衆の命を守るためなどの「仁」の心がありました。「知識」としてオランダの学問を身につけました。幕府から弾圧されても活動する「行動力」がありました。

このように、高野長英は彼の「夢・希望」である「真理の実現」のために、「仁」「蘭学の知識」「行動力」を身につけ、鎖国の中から日本を近代化に導きました。

「真理はあなたがたを自由にする」。これは『新約聖書』のヨハネの福音書に出てくる言葉で、国立国会図書館のカウンターの正面に掲げられています。数多くの科学的真理の発見や実現によって、私たちの生活は豊かになり、医療も進歩して、病気の不安や苦痛から自由になり寿命も大幅に伸びました。そして、真理を覆い隠す迷信や偏見、差別から解放され、一人ひとりが自由に生きられるようになってきました。

高野長英の働きも、その「真理の実現」の一端を担っています。長英の一生は長い歴史から見れば一瞬の流れ星のような輝きかもしれませんが、しかし、「長英の流れ星」は、私たちの心に飛び込んで永遠に生き続けています。